新矢イチ
えいきち
illustration
禁断レポート
forbidden report

サンプルのご閲覧ありがとうございます。

●お品書き

禁断レポート2本編サンプル

限定小説サンプル

禁断レポート2

【媚薬(びやく)】

狭義(きょうぎ)には催淫剤(さいいんざい)と呼ばれ勃起不全の治療に使われる薬を言い、広義(こうぎ)には性欲を高める薬、恋愛感情を起こさせるような薬を言う。惚れ薬とも称される。

しかし効果はあくまで相手の性的な興奮を煽(あお)るのみ。相手の恋愛感情を自在に操(あやつ)るまでは不可能とされている。

だれもが一度は考えたことがあるはずだ。「この世に本当に惚れ薬が存在するとしたら、どんな相手でも絶対に落とすことができるんじゃないか」と。

そのもしもが現実になったとき、人々は何を望むだろうか。

高嶺(たかね)の花(はな)の美女たちを思い通りに操ってみたい。
元彼をひれ伏せたい。
毎日べつの女を抱きたい。
親友の恋人を奪いたい。

――『彼』の願いは、常に一貫していた。
双子の兄、その人だけを愛していた。兄に愛されたいと常に願っていた。

あるとき彼のねがいは思いもよらずかなってしまう。
ささいなきっかけで、血を分けた実の兄と性的関係を持つようになった。
兄と愛し合う日々は、想像以上に幸福で甘美な味だった。反面、彼は自我(じが)と道徳心のはざまで追いつめられた。
常に世の中の全ての人間から後ろ指をさされている気がした。毎夜毎晩その罪を上塗りし、孤独感と罪悪感に精神は押しつぶされていった。
しかし腕の中で喘(あえ)ぐ兄のすがたは、全ての苦悩を忘れさせてくれた。気の遠くなる絶望の世界で、その瞬間だけは深く強い幸福に包まれた。
罪悪感は偏った恋愛観をつくりあげ、やがて異常な執着心へと変貌(へんぼう)した。彼はますます兄との関係におぼれた。細胞が、魂が、肉体が訴える。
俺はもう、この人なしでは生きていけないと。
受け入れてくれた兄が愛しくてたまらなく、ただ一心に慈しみ愛し続けた。

――しかし。名残雪の吹きすさぶ三月のある日。
彼の恋はあっけなくも簡単に終わりを迎えた。
突然だった。
『もう全部、終わりにしたい』と兄は告げた。
他に大切な人がいると言われた。
本当は愛してなんかいない。からだを許したのは、恋敵（ライバル）の君が邪魔だったから。好きな人から君を寝取りたかっただけだと。
そう言われてようやく、兄にいいように利用されていた事を知った。

彼は兄の前から姿を消した。

――やがて月日は流れ、遠い異国の地で、彼は大人になった。
いまだ兄を許す気持ちはなかったが、あきらめもできずにいた。
どこに居ようと変わらず、一途（いちず）に兄だけを思っていた。しかし、それが二度とかなわぬことは分かっていた。

人間の業を知り。裏切りを知り。
彼はもっと孤独になった。無情な現実に、次第に精神も追い詰められた。
そのうち兄を憎み恨むようになった。
好きにならなければよかった。何度も後悔した。
だがどうしても嫌いになれなかった。好きだった。どうしようもなく好きだった。

ついに彼の心は狂ってしまった。
いつしか人生の目的さえ変わり。
報復のため、日々を持て余すようになった。

もう一度兄の心を手に入れたい。その方法を模索する為だけに生きる日々が続いた。
何年も何年も何年も何年も……。
やがて執念は、思いがけない形で実を結ぶ。

――それは兄に裏切られて実に七年後、二〇一六年二月某日のこと。
彼の起こした奇跡と同月同日のこの日は、奇しくも世界中の科学者が禁断としてきた『惚れ薬』が世に出るバースデーとなった。

惚れ薬の名は『reverse』。
脳の視床下部のうち、快楽中枢のみをマヒさせることで、人間の感情記憶を自在に操作させる、世界に唯一の惚れ薬だ。あくまでうわさだが、新薬開発までの臨床実験で幾多のホームレスが犠牲になったとささやかれている。

新薬の開発にひたすら人生をつぎ込んだ彼は、気付けば一〇〇年に一人の天才ドクターと呼ばれるようになっていた。
男の名は木瀬哉太。単身アメリカへ留学後は、母方の旧姓『小野』の名を語ってきた。もしや、この先兄に行方を探されたときを想定した小さな抵抗だった。
ともあれ。七年におよぶ策謀に、ようやく終止符が打たれようとしている。
時がきたのだ。
裏切りと絶望をもたらした双子の兄、孝弘に報復するその時が。
あの人を再び手にいれる――……否。

足元へひざまずかせ、自らの過ちを心から後悔させてやる好機が訪れたのだ。

ゆっくりじっくり気付かない所から追いつめ、逃げ場を失ったその瞬間――あの人の自我も精神も自尊心も。あの美しい身から溢れるもの全てを捕えてやる。

自覚すればいい。この先もう二度と、アンタは俺という存在から逃げられないことを。

＊

廃虚と化した、深夜のうす暗い研究室内。一人で鼻歌を歌いながら、哉太はデスクに散乱するガラクタの中から一枚の名刺を取り出した。

『大嫁製薬株式会社　第一営業部　営業一課　木瀬孝弘』

吐息で名前を復唱しながら、名刺の下の顔写真を指でなぞる。自然と顔がほころびシャドウブラックの眼がわずかに揺れる。

受付は『日本人はしつこい』と怒っていたが、そのうちの一人であろう彼の名前は、ブロードウェイミュージカルのプレミアムチケットなんかより、よほど魅力的だと思う。

色褪せぬ兄の記憶はこの日、美麗な一人の青年の顔に上書きされた。

――小悪魔が。ますます美人になってら。

また鼻歌を歌い、夜明け前のオフィスをゆったり歩く。支配するものは、兄への執着だけだった。ブラインドを指でこじ開けると、月明かり

に野心を灯した二つの眼がそこに映る。
（さあ。遊ぼうぜ、兄貴）
口元に笑(え)みをほころばせ。やがて彼の姿は夜の闇とともに消えた。

＊

二〇一六年、四月某日。
その日も目覚めは最悪だった。ひどい寝汗で部屋着は背中までベッタリと貼りつき、シーツは手の中でぐしゃぐしゃにシワを作っている。
闇を必死に追いかけていた後ろ姿はもういない。
またあの夢かと、孝弘は起きがけに複雑なため息をついた。
「――哉太」
夢の続きみたく、ぽつりと名前を呼ぶ。当然返事はない。七年前から変わらぬ空虚が孝弘の胸に隙間風(すきまかぜ)を吹かせる。
サイドボードに置いたジパンシイの腕時計を取った。
時刻は午後八時四十五分。時差を調整していないせいで日本時間表示のまま。ここ、ニューヨーク市は現在朝の五時をまわった頃だろうか。
（三時間も眠ってない）
ニューヨークに着いてから毎晩のように同じ夢を見るせいだ。
双子の弟であり事実上恋人だった、哉太の夢。
孝弘はしいて自覚はなかったが、哉太はそう思っていた。
当時は、哉太の『好きだ』という言葉を軽く考えすぎていた。肉体関係は、引き止めるための単なる方法に過ぎなかった。断れなかった。嫌われるのが怖かった。
いつか必ず終息が訪れるはずだ。こんな関係、長く続くはずがない。
安易な考えで優しさに甘え、幾数回と身をゆだねてしまった。考えもしなかった。哉太はこれを永遠の愛と捉えていたことなど。

『――信じらんねえ。最低だわ。本当……悪魔だよ、アンタ』
哉太がニューヨークへ留学し七年。その後の消息はいまだに不明。両親にさえ居場所をつげず、彼はどこで何をしているのだろう。
「……」
起床まであと一時間半。もう一度目を閉じれば、また彼が夢に姿を現わすだろうか。自分を指さし、昔と変わらぬあの声で裏切り者とののしりながら。
考えるだけで居たたまれず、枕をつかむと顔に押し付けた。
夢で感じた口付けの名残りが、七年前と変わらず首元をジリジリと優しく焦がしていた。

午前六時。意を決しベットを出る。
一週間の海外出張も今日が最終日だ。孝弘の顔にほっと安堵の表情が浮かぶ。
足元のビジネスバックから携帯を取り出す。指先はすぐアドレス帳から一人の名前を探しあてる。
―柚木―
仕事のめどがたつまで連絡しないと決めていた。声を聞けば過保護が暴走するだけだろうし、柚木より仕事を選んだ自分を責めてしまうだろうから。――もっとも、ここがニューヨークでなければもう少し寛容な決断ができた可能性もあるが――
『……ふあい』
日本式の呼び出し音がプルルと鳴って数秒。おっとりとした舌足らずな掠れ声が、七日ぶりに孝弘の鼓膜をくすぐった。

「おはよう柚木。もしかしてもう寝てましたか」
クスクス笑いながら孝弘は思い人の名前を呼ぶ。『あ、え、孝弘？』
『んあ、いま、何時……』受話器の向こうは何やら慌ただしい。しばらくせわしないノイズ音が流れる。それから。『うわっ』とつぜん大声がして、どすんっと激しく電波が揺れた。
「柚木？」
『あーごめん！　ベットから落ちた』
「大丈夫ですか」
腕時計の針は二十二時を過ぎたところ。少し遅いイブニングコールのつもりだったが。どうやら柚木は一歩先に睡魔に襲われていたようだ。慌てて飛び起きるさまを想像して笑ってしまった。『うん、へーき。おっかしいなあ。さっきまで起きてたんだけど。あ、元気にしてた？』
「はい。おかげさまで」
『いまから出勤？』
「そうですよ。よく分かりますね」
ふふんと柚木が笑った。。
『出張、今日が最終日だっけ』
「ええ。最後の金曜です」
これでやっと日本に戻れます。
ドレッサーチェアに掛けておいたベストに袖を通し、片手で器用にボタンをとめる。手前の鏡台で、ダークグレーのスーツセットを颯爽（さっそう）と着こなした品のある青年が、無表情にこちらを眺めていた。
横になでつけた前髪が左目にふわりと掛かって顔全体は柔和な印象。伸ばしっぱなしの太めの眉（まゆ）は、歳をかさね自然と細くなった。黒目の大きくて高潔なまぶたの上では、男らしいというより母性的なイメージが強い。ほどよく上を向いた口角に、ぽってりと重たそうな朱色の下唇。

肩幅が広いわりに顔は小さく、仕事先では伊達の黒縁眼鏡がなければ『奇麗』だとまで言われる有りさまだ。
屈強な男らしさに憧れる一方、理想からどんどんかけ離れる自らの容姿を見るのが嫌で、最近は鏡に映ることすら避けていた。
久々におのれの姿を目の当たりにし、あまりの軟弱さにため息が止まらない。
『そっか、おつかれ。それで、仕事はうまくいったの』
「……」
『孝弘？』
「――あ、はい」

孝弘は二度目のため息を嚥下する。
「それが、まったく。交渉すら無理でした」
そう、一週間もかけたというのに、仕事は全くだった。
『失敗したってこと？』
「まあ…、はい。もうなんていうか最悪です」
相手は話を聞くどころか初日から門前払いだ。おかげでこの一週間、通訳としての出番は一度もなく、たいそう時間を持て余してしまった。
『そっか。大変だったね』
「いや、自業自得ですよ。あんなことをすれば誰でも怒ります」
無理もない。相手にすれば、日本からやってきたとある大企業の集団が、昭和初期の地上げ屋よろしく押しかけてきたようなものだ。
それは誰だって激怒する。それ程の事をしでかしてしまったのだ。
不運なことに、孝弘はくわしい業務内容を一切知らされておらず。現地に赴くまで、彼らの目的さえ不明だった。
どこか様子がおかしいと気付いたのは、初日の朝を迎えた後だった。
『早速だが、小野という研究者を我が社に引き渡すよう伝えて欲しい。

金ならいくらでも支払う。もし拒否するならば痛い目に遭うと忠告してくれてかまわない』

案内された応接室で、同行したスタッフは最初から喧嘩腰だった。

『なんなら買収してやってもいいんだぜ、あんたらも大好きなんだろ？これだよこれ、マネー。……おっと、気を悪くしないでくれよ』

そのうえ通訳していいのかと迷うほど、最低な発言を連発。親指と人差し指でお金のジェスチャーをつくって「マネー」と言っていた。彼らは発言の内容を全て目の前の相手に告げろともいった。

――こんな失態、我が社の恥だ。

『Get out!!』と罵声とともに締め出された先方のあの剣幕を思いだすだけで、いまでもひどい頭痛がぶり返す。

医療機器シェア八割を占める日本屈指の製薬会社が、よりによってなぜこうも無礼な手段を選ぶ必要があったのか。理由が不明なだけにショックも大きい。

相手先はドラッグストアを中心に薬を卸す小さな製薬会社だ。一般ドラッグから医療用の器具、果ては男性用化粧品まで幅広く扱う『大嫁製薬株式会社』とはフィールドは違うが、いわゆる同業他社にあたることは確かだろう。

接点という接点はそれだけ。過去数年分の経営議事録も調べてみたが、やはり関連は一切ない。

明らかな情報はあとひとつ。同行した社員たちは、そこに在籍する一人の研究員、『ドクター・オノ』という人物が喉から手がでるほど欲しいと、異様な目つきでそう漏らしていた。――残念ながら情報はそれだけだ。

『孝弘、いつ戻る？』

「今夜の夕方の便ですから、明日の夜には自宅に戻っていると思います」
『明日…そっか。――でも、忙しい、よね』
柚木の声がだんだん小さくなる。
「しばらくは上からの報告業務に追われるでしょうね」
『――うん』
「何せ大失敗していますから」
『……だよね』
「いまは帰国した後を考えている時間が一番苦痛ですね」
『ふうん』

そっけなく短い返答が続く。相槌(あいづち)はこころもとなく、別の何かに気を取られているようだ。
――何かあったのか。
「柚木？」
「くぁぁ」
「……」
『ん、ごめん呼んだ？　なんか目が覚めなくってさ』
しばらく耳を澄ましてみる。テレビの音声だろう、ニュースを読み上げる女性の音声がうっすら流れてくる。他は静穏(せいおん)としており、特に異変は感じない。
(良かった。眠たかっただけか)
――どうやら変に深読みしすぎていたようだ。やはり過保護が過ぎていると孝弘は苦笑する。
「柚木」
『ん、何』
「来週の夜、会いにいってもいいですか」
『――え、いいのか』
「ええ」

『仕事、忙しいんじゃねえの？』
「大丈夫ですよ。僕も仕事に日課を奪われて、役不足を感じていた所です」
『本当？』
「落ち着いたら、また毎晩会いましょう」
『うん…。ごめん、ありがとう。本当は俺、孝弘が居なくて寂しかったんだ』
「おや。珍しく素直ですね」
『は。いつも素直だろ』
「そうですか」
『そうだよ』
孝弘はクスクス笑う。
「すみません、冗談がすぎましたね。柚木はいつでも素直でいい子ですよ」
『ふーん…』
「僕も会いたいです。本当は、すぐにでもあなたの元気そうな顔が見たい」

そう言ってしばらく、柚木の声がしずまった。やがてゴホンッと咳払(せきばら)いが一回。
『うん、でも、俺も……孝弘に会いたい。本当に、すげえ会いたいよ』
遠慮がちだが素直な返事だ。
深い意味はないと分かっていても、自然と顔がほころんだ。
柚木はいまだに虐待のトラウマから抜け出せていない。放っておけば平気で自傷もする。食事も摂(と)らない。アルバイトも平気で休んでしまう。精神が不安定な日は突然「ねえ、愛してるよ」と擦り寄ってくる事もあった。精神科医の話では、症状はまだ序盤だという。これから何年も、彼は自らの心の闇と闘うことになる。いまはただ、自分に出来る役割を

果たすだけ。毎日通っているのはその為だ。
早く会いたい。
寂しい思いをさせた分、うんと優しく甘やかしてやりたい。たくさん頭をなでてやりたい。抱きしめたい。
可能ならば夜通し側に付き添い、君を苦しめる悪夢から守りたい。どれだけ尽くしても足りない。柚木のこととなると、いつも過剰に保護欲を煽(あお)られる。
「柚木」
『うん』
「ちゃんと食事はとっていますか」
『食ってるよ、大丈夫』
「夜は、怖くありませんか」
少し沈黙が流れた。
『大丈夫、怖くねえよ』
――そうか。よかった。
『あ、そうだ。聞きたいことあったんだけどさ』
「ええ」
『哉太には会えた？』
唐突な問いに、口元から笑みが消えた。
二人の過去を知る由もないのだから、柚木に悪気がないのは分かっている。昔を懐かしんでいるのか、口調は心なしか弾んでいた。
『アメリカに行っちゃって七年だっけ。ずっと連絡がないんだよな。えーとどこだっけ、アイツの留学先。マンハッタンの……』
「ミッドタウン地区」
何度リピートしたか分からない情報を、なかば棒読みで答える。
『あーそうだった。ミッドタウンのバークレーカレッジ』
801 Third Avenue, New York, NY, 10029, United States.
1-212-××××××

あれから何度電話しようと迷ったか。おかげでステイ先の住所はおろか電話番号は暗記済み。いまだに忘れられないのは、哉太の記憶が少しも色あせることなく残っている何よりの証拠だった。
哉太に会いたい。嫌われていてもいい。許されなくても……。せめてニューヨーク(こっち)で元気にしている姿を一目で良いから見たい。せめてもう一度、声を聞かせてほしい。
その根底には『恋しい』という感情があることを、孝弘はまだ自覚していない。
あの日の自分と真っ向から向き合うこともできぬまま、時だけがすぎてしまった。
柚木の言う通り。出張先がニューヨークと知り、もしかしたら再会できるかもと淡い期待を抱いていた事も確かだ。
けれど、
「残念ながら……会えませんでした」
『そうか』
「カレッジは随分まえに卒業していたみたいです。施設側も、その後の足取りまでは把握していないと」
実は出張当日の午後、仕事の時間の合間をぬってカレッジを訪れていた。再会どころか、哉太にむすびつく情報はゼロ。
弟とつながる唯一の生命線は、あまりにたやすく途切れてしまった。
『そ、か。残念だったね。はあ。哉太のやつどこへ行っちまったんだか』
「……そうですね」
こうなったのは全て自分の責任だ。余計な欲が出て、柚木を独占したくなった。何も知らない哉太をだまし、挙句の果てには兄弟の一線まで――。
『孝弘』
「はい」

『哉太が戻ってこないのって、もしかして俺のせい？』
「え？」
『俺が孝弘を独占しちゃってるから、哉太、嫉妬して出て行っちゃったんじゃないのかな』
本音をえぐる二度目の問いに、息が止まる。
「――いえ、違いますよ。むしろ僕の方が」
『え？』
「……っ」
駄目だ。
哉太との間に起きた過去を漏らしてしまえば、柚木とのつながりはきっと消えてしまうだろう。
僕はきっと嫌われる。汚い人間だと嫌悪される。
「……いえ。昔、卒業後の進路で言い争いしてたことを思いだしていました。哉太は水に流してくれているといいのですが」
鏡の向こうに、遠い目をした青年がいる。首にかけた紺色のネクタイを握りしめ、漆黒の瞳はじっとこちらを見つめている。やがて無表情は崩さぬまま、形のいい唇だけが静かに動いた。
声もなく『裏切り者』とただ一言。

＊

孝弘との通話が途切れると、柚木はふたたび絶望の淵に突き落とされた。
「やっと終わったか」
しわがれた男の声が柚木を呼んでいる。背後のベッドに裸で寝そべる初老の男だ。

本編の立ち読みはここまでです。

電子書籍限定小説「焦れったい夏」立ち読みサンプル

「焦れったい夏」

哉太×孝弘、家族旅行編　二人が仲の良かった高校生時代の甘々ぶりを描いた読み切り短編です。

【あらすじ】

二人が秘密の関係になって最初の夏休み。両親の提案で、海水浴に出かけることになったのだが……。

＊

時刻は午前六時半。孝弘はこの日も、哉太の部屋のベッドで目覚めた。

「おはよう、哉太」

隣の無邪気な寝顔を確認し、そっとシーツをまくる。体を起こすといたたっと腰に手をあて、たたんでおいた黒の半袖シャツとジーンズに着替える。ボタンはきちんと上までとめる。孝弘には当たり前のルールだ。

「ふう」

じっとりにじむ額の汗をぬぐい、一足先に一階へ。

この日、木瀬家の食卓には、めずらしく両親がそろってトーストをかじる姿があった。リビングはマンダリンの芳香が充満している。

「おはようございますお母さん」

「おはよう。早いわねえ。夏休みなんだからゆっくりすればいいのに」

短パンにギンガムのシャツ一枚でイスの上にあぐらをかくこの女性を、一見して男子高校生二人の母親と見抜く者は皆無に等しい。

「夏休みですから。家事くらいしないとばちがあたります」
おかずでも作りましょうか、と両親へ。
「ありがとね。ホントそれ哉太に言って聞かせたい台詞だわ。ねえダーリン」
はあとため息をつくのは母親の環、三十四歳。腰にちかいソバージュのロングヘアは頭上でお団子にまとめ、流行りの眉と唇を強調した派手なメイクを施している。こう見えて名の知れた進学塾で講師をつとめるキャリアウーマンだ。
「おいおい。孝弘が優秀すぎなだけでしょ。年頃の男の子なんて、みんなあんなものさ」
でもってこちらのやんちゃな風貌の男性は父親の浩介、三十五歳。趣味はサーフィン。夏はアロハシャツとストローハットを欠かさない。こちらも不良がそのまま大人になった見かけだが、一級建築士としての腕は確か。現在は都内にオフィスを構え、環に負けず劣らず仕事に明け暮れる日々を送っている。
講義に出張にと、なにかと家をあけてばかりの二人がともに家にいるのは実に数カ月ぶり。一般の家庭では当たり前だが、木瀬家では大変珍しい光景で間違いない。
「けどさあ、双子なんだからちょっとは似てもいいんじゃない？　とくに性格とか」
「俺は哉太くらい不愛想でかわいげのない方が普通だと思うよ。あ、目玉焼きちょうだい」
「はい」
エプロンのヒモを通しつつ冷蔵庫を物色する。屈むとまた腰につーんと鈍痛が。う、とうなると哉太の顔が脳裏に浮かんだ。
「それさ、最近のアイツの態度を知ってて言ってる？　かわいげがない

の度をすぎてるよ。哉太のやつ、何が何でもあたしを部屋に入れようとしないんだから」
　思春期に突入したあたりから「勝手に部屋に入るな」と環を追い出していたが、どうやら最近は外出時までかぎをかける用意周到ぶり。環はそれが気に入らないと怒っている。せめて掃除くらいさせろっつーの！とドンッとテーブルを叩いた。
「あははは。見せたくないのがいっぱいあるんだよ。俺もガキのころはしょっちゅう隠してたなあ、雑誌とかビデオとか」
「ダーリンは黙ってて！」
「はい」
　ついうっかり過去の黒歴史を晒したあげく、ピシャリと叱られた。風船がしぼむように浩介からしゅるると笑顔が消える。
「あのゴミ屋敷、なんとかしないと。虫でも沸いてんじゃないかしら。あー汚い！」
「うっせーな。虫なんか沸いてねーわ」
　とつぜん声がしたので、孝弘は驚いて頭をあげた。みれば哉太がリビングの入り口に。上下とも黒のスウェットに両手をつっこみ、かったるそうに寄りかかっている。
　さらにリビングをみまわすと、
「なんだよ。両方いんのかよ」
　両親をみるや迷惑そうに、寝起き特有のガラガラにしゃがれた声で毒づいた。とうぜん環の逆鱗（げきりん）に触れるわけで。
「はあ!?　それが朝の一発目に言うセリフ？　おはようございます位言えねーのかよてめえは」
「……るせーな」
　ぼりぼり頭を掻きながら角の席にどさりと座る。
「大体ね、アンタの部屋は汚すぎんのよ！　服なんか出したら出しっぱなし」

（確かに）
　添え物のレタスをちぎりつつ、そこは孝弘もひそかに同意する。
「あんな部屋でどうやって勉強してんのよ！　ていうか来年から留学先でどうすんのさ。あんな部屋じゃ皆に笑われるよ？」
「孝弘―、コーヒー淹れて」
「あ、はい」
「ちょっと人の話聞いてんの!?」
「っせえなあ」
「うるさいじゃないよ！　部屋の掃除くらいしろっつってんだよ。てめえの為だろ」
「そういうのがうぜーんだよ。親だからって何でも首つっこんでくんな、マジうぜえ」
「はあ!?」
「まあまあ、ママも落ち着いて。これじゃせっかくの休暇が台なしだからさ」
　元レディースの環は、現役で不良の哉太と相性がめっぽう悪い。顔を合わせば怒鳴り合ってばかり。父の浩介いわく、哉太のけんかっぱやい性格は環の若い頃と生き写しらしい。つまりは似たもの同士。行動も思考も丸被りだから、衝突ばかりしている。
「ふん。アンタなんかさっさと海外でもどこでも行っちゃえば」
「言われんでも出てくわこんな家」
「あんたねえ……」
「そこまで。けんかは終わり。はい、ママもちゃんと座り直して」
　椅子に片方の膝を立てて座るまさに臨戦態勢の環を、隣で浩介がたしなめる。「哉太もちゃんと座れ」合わせ鏡のごとき、こちらも膝を立てて座る哉太をぴしゃりと叱る。
　両者、不承不承ながらも座り直し。
「はい、目玉焼きとスクランブルエッグです。緑黄色野菜のサラダもあります。デザートにプレーンヨーグルトとバナナを和えました。哉太は

コーヒーをどうぞ。角砂糖ふたつとミルクが多めで良かったですね」
タイミングを見計らったように、孝弘手製の料理をずらりと並べたところで。
「よっし。久々に家族全員そろった事だし、気をとりなおしていきますか」
じゃじゃ〜ん。
足元から『夏の海をもっと楽しもう！　湘南ビーチを網羅・旅行ハンドブック』と書かれた雑誌を取り出した浩介はにかっと白い歯をみせて笑った。
「突然だが今日より一泊二日の家族旅行に行くことに決めた。実はママと予定あわせて有給とったんだ。お前らの高校生活最後の記念だ、ぱーっと遊ぼうぜ！」

＊

唐突な『家族旅行宣言』から二時間。孝弘はフォレスターの後部座席で揺れ動く景色を眺めている。
『ルートヲ逸レテイマス、コノママ都道府県道四十六号線へ進ンデクダサイ……』
「あーっもうっ。このゴミゴミした小道は何!?　わっけ分かんないんだけど」
「うーん。裏道を入ってまずったな」
無事に高速を下りたものの、どうやら目的地を目前にして迷った様子。ナビゲーションが延々とルート変更を呪文のように唱える一方、ここはどこだと頭をかきつつなおも右に左にハンドルを切る浩介に、助手席の環が地図を握りつぶし発狂する。
「ちょっと勝手に進むのやめなさいよ！　もういいあたし運転変わる！」
「ママちょっと黙っててよ。うーん、多分この角を曲がれば……」

左側の後部座席では哉太がシートに頭をもたげ、奇妙なほど穏やかな表情で目を閉じている。騒々しい車内で完全に休息モードだ。
「哉太」
「――ん」
暇だったので話しかけてみる。熟睡してなかったのか、すぐに右の目が開いてこちらをみた。
「このままだとホテルに到着するのはお昼をすぎそうですね」
うん、と軽いあいづち。なんだか元気がないと思ったら、
「腹減った」
朝食抜きがいまごろ祟り、ああだこうだと揉める両親を横目に、きゅるりと腹がなる。
「あ、アメ食べますか、少し持ってきました」
「いる。ちょうだい」
ん、と口をあける。ポーチからアメの袋を取り出し、破いた中身をポンと押し込む。すぐに口が閉じられ、指まで一緒に食まれてしまった。
「……」
しかもなかなか口から出してくれない。「あ、あの」「哉太」「哉太、指」「指が」ふっくらとした奇麗な唇と指を交互に見ていると、なんだか変な気持ちになる。ゴクっと自分の喉がなったので孝弘はいっそう慌てた。
「ん。食った」
数秒後、ようやく解放された。哉太は満足げに口をもごもごさせている。目が合うとまた恥ずかしくなり、パッと反対の窓側を向いた。窓ガラスには車内の様子が映りこんでいる。ちょうど真後ろに哉太がいて、じっと孝弘の方をみている。
「すげー甘いのな」
「そうですか」
「うん。甘かった」
『甘い』じゃなく、『甘かった』。

過去形で言っているところが気になった。
その言い方だと、まるでアメに対する味の感想に聞こえないと思って。
じゃあなにが甘かったんだと考え、考えたのち、ぼうっと顔が赤くなる。
「……哉太は、甘党ですからね」
動揺を隠して、孝弘はへへへと柄にもなく子供っぽい調子で笑った。
視線は一向に動かない。
だんだん唇の柔らかな感触が頭から離れなくなり、人差し指をぎゅっと握りこむ。
「言うほど甘党じゃねえよ俺」
「……そう、ですか」
「孝弘。なんでこっちを見ねえの」
「いや……」
「照れてんの」
「……」
「やっぱかわいいわ、アンタ」
窓ガラスを介して、目を細めた哉太とみつめあう。彼はたまに、目で笑う癖がある。だから口が真一文字になっていても、満面の笑みだと言い張ることが多い。例えばいまみたいに。
車内は相変わらず騒々しかったが、環の怒鳴り声も、通りすぎる街並みも、何ひとつ頭に入ってこなかった。
「本当かわいい」
二度目の甘い声も聞こえないフリをして、孝弘はじっと窓の外だけを見ていた。

＊

ようやくホテルにたどり着いたのは、正午をまわった頃だった。運悪く団体のツアー客がフロントのチェックインコーナーを占領しており。

手続きを終えるまでさらに小一時間。すると次はエレベーターで問題が発生。ここにも人が殺到し、長蛇の列である。さらに時間を持て余し、結局十七階の予約部屋に着いたのは十四時半を優にすぎた頃だった。

室内の雰囲気はまずまず。三十七平方メートルのスタンダードタイプで、たんぽぽの黄色を基調としたすがすがしい印象。部屋に入ってすぐのところにキッチンにトイレと、ホテルでは珍しい家族風呂が完備されている。奥の室内はダブルベッドが二台にハイダーベッドとソファベッドが一台ずつ。五十インチの液晶テレビセットを囲んで配置されている。

ここは江ノ島海岸まで歩いて十五分程度だし、バーベキュー会場も近い。しかもネットで予約すると二十パーセント割引特価で利用できる。丸一日遊べる場所としては最適なのだが、誰しも考えることは同じだったようだ。

ツアー客にまぎれ、ようやくビーチに向かう。泳ぐ前にまずは腹ごしらえだと、向かったのは海の家。こちらも満員御礼である。三十分待ってようやく席を確保。浩介と環は焼きそばとポテトにコーラのセット。孝弘はカルボナーラとホットコーヒーを。哉太はハンバーガーセットにラーメンとチャーハン、おまけにかき氷まで注文し、驚いて口をあんぐり開ける両親の目の前で全てペロリと平らげた。

「あー疲れた。もう夏休みの海はいいわ」

西日がこうこうと照り付けだした午後十六時半。環はすでにげっそりとやつれた顔。猫のように背中を丸め、ビーチパラソルの下であぐらをかいている。こう疲れていては泳ぐ気にもなれず、キャミソールワンピの下には水着すら着用していない。

「まあまあ。そんな怒んないでよママ。はいこれ」

いっぽうの浩介は海の家で購入したかき氷でごきげん取りの最中。こちらは服の下に海パンを着ているが、愛妻を気遣って海に入れない模様。

環は、「ふん。安い献上品だことね」イチゴミルクをぶんどると一心

不乱に掻き込んだ。
「その代わり明日は朝一番にビーチに来れるよ、ママ」
「あっそ。……それよりあの子たちはどこに行ったのかしら」
「うん？　さっき二人であっちの岩場の方に歩いていってたよ」
「あらそう」
「あいつら、いつの間にあんな仲良くなったんだろう」
「男の子だからけんかもすれば仲直りもするわよ」
「うーん」
浩介の記憶にあるのは、ひたすら兄を避けていた哉太の姿である。理由はさだかでないが、ある時期から孝弘と距離を置くことが増えた。孝弘もうすうす自覚していたようで、帰宅するやリビングを離れる哉太を、よく寂しそうに見送っていた。孝弘の温厚な性格だと、兄弟げんかが理由じゃなさそうだし。
(さすがにあれは、見ていてかわいそうだったなあ)
聞いても哉太は『何でもねえよ』と言うだけ。休日だって孝弘の行動時間をことごとく避けていたみたいだし、『何でもない』わけがないと思うのだが。仕事に追われていたこともあり、兄弟たちを十分に気遣ってやることができなかった。それはいまでも悪かったと反省している所だ。
だが、今度は二人の距離がやたらと親密になっている。気付いたのはごく最近だ。
今朝もしかり。平気で昼まで寝ていた哉太が、最近は孝弘にあわせて朝早く起床している。孝弘が起きると哉太も起きて来るから、生活態度を改めた理由は孝弘が関連していると見て、おおむね間違いない。
そういえばさっきは料理中の後ろ姿をチラチラ見ていた。
どういう心境の変化だろうか、哉太は常に孝弘の行動を追いかけている。
(不思議だなあ。あいつ、前まであんなに孝弘を避けてたのになあ……)

――もっとも、年間の半分以上をオフィスですごす浩介には、家を不在にしている時間、兄弟がどうしているかまでは把握できていないのだが。

「まあ、仲が悪いよりかはいいか」

「そうそう」

「あとはママと哉太が仲良くなってくれるとうれしいんだけど」

と、イチゴミルクを食べ終えて満足げな横顔をチラ見。環は心外とばかりジロリと目を据える。

「あら。あたしはちゃあんと愛しているわよ。どちらとも平等に」

「ただちょーっと気が合わないだけなんだよね？　哉太と」

「何よ、あたしの教育方針に文句でもあるわけ」

「いや、その、ごめんなさい」

浩介はそくざに誤った。正直なところ、環には頭が上がらない。仕事と家庭を両立しながら、子供たちを立派に育ててくれた。家事も掃除もろくにできない仕事人間な夫であるからこそ、なおさら肩身が狭い。

「ささっ俺もたまにはあいつらと遊んで来ようかな」

言い訳がましく口にすると、そそくさと海へと駆けていった。

＊

いっぽう、岩場の影に隠れる二人は。

誰の目にもつかぬことを逆手に、よろしくやっていたわけである。

「哉、太」

「うん？」

「ひ、とが」

「だれも来ねえよこんなとこ」

「でも」

孝弘が紡いだ次の言葉は、強引に覆いかぶさる唇へ消えてしまった。

ここは江ノ島海岸でもかなりの奥地。観光客用に整備されたエリアは岩場を挟んだ隣まで、こちらはワカメの干からびたのや貝殻のくずなどが浜辺に散らかっている。少々見た目は悪いが人気がなく、実は地元の若者ぞ知るデートスポットでもある。こっそりいちゃいちゃできる穴場ということだ。

（一体、どこで見つけてきたんだ、こんな場所……）

ここだと全身をべたべた触りながらキスをしたって問題ない、とばかり哉太の舌遣いはいつにもまして濃厚だ。

「う、む……っ」

ぬるっと舌を吸い上げられて、参ったとばかり、孝弘は熱い吐息をもらした。

浩介が自由行動を宣言して数秒たらず。哉太が「いい場所を知ってる」というので同行したらこれだ。

「ん、んッ」

息苦しさに顔をよじるが、一向に唇は開放されない。こうなればもう、身をゆだねるしかない。抗ったところで哉太の強引さには勝てない。

ごつごつした石の壁に背中をおしつけ、肩幅程度に開いた脚は、その間に哉太の体を受け入れる。乳輪を指の先ではじかれ、ふうっと甘い声をもらす。むしゃぶりつく哉太の唇が、それを全てのみこんだ。

「う、ふ」

兄弟以上の関係になり四カ月。恋愛経験もほとんどない孝弘にはあまりに濃厚な日々が続いている。

恋愛の段階を、女子がよくアルファベットにたとえて話をするが、孝弘にとってＡもＢもＣも、初めては哉太だった。

もちろん葛藤もあった。けれど関係をもつうち抵抗心は衰え、最近は夜が来るのを待ち望んでさえいる。おのれの気持ちの変化に、孝弘は何よりとまどっている。

「……っあ、待って、そこは」

「ふは。いまさらそれ言う？」

「だって、あっ、触るだけって約束」

ご閲覧、ありがとうございました。以降、製品版をご覧くださいませ。